



第24回「明るい家庭づくり(家庭の日)絵画展」

講 評

今年度の「明るい家庭づくり(家庭の日)絵画展」には、新型コロナウイルス感染症拡大防止のための学校の臨時休業(休校)があったにもかかわらず、府内49校から、483点というたくさんの応募がありました。どの作品からも子どもたちが家庭を中心とした生活の中で感じた温かさや和やかな雰囲気がよく伝わってきました。また、感じたことや考えたことを懸命に絵に表そうと努力している様子が伝わり、その表現に向かう姿勢が、作品の良さを一層高めているように思いました。

子どもたちの作品は、特に、家族や友達と何かをしたときの「楽しかった」「うれしかった」という気持ちが、絵の中にあふれていました。今年度は、例年に比べ、家族で旅行やプールなどに行ったときのことを描いた作品が少なかったのですが、家の近くでバーベキューや花火をする場面、家の中でトランプをしたり昼寝をしたりくつろいでいる場面、家庭菜園に取り組んでいる場面など、コロナ禍においても家族で楽しく過ごしている様子が伝わる作品がたくさんありました。ケーキを前に家族でお祝いする、家族みんなでたこ焼きや手巻き寿司をおいしそうに食べる、赤ちゃんが生まれて家族が増えた瞬間、など家族と一緒にいること、体験できることの喜びとともに、親子や家庭内におけるほほえましい雰囲気が良く伝わってきました。

審査に当たっては、絵画としての素晴らしさはもちろん、「明るい家庭づくり運動」の趣旨に照らし、家族の心のつながりや温かい雰囲気が、それぞれの子どもらしい発想や表現で伝わってくる作品を選考しました。

家庭教育は、すべての教育の出発点です。家族のふれ合いを通して、子どもが、基本的な生活習慣や生活能力、人に対する信頼感、豊かな情操、他人に対する思いやり、基本的倫理観、自尊心や自立心、社会的なマナーなどを身につけていく上で重要な役割を果たしています。

しかし、最近では社会やライフスタイルの変容を背景に、家庭でのコミュニケーションが希薄になってきているとの指摘もあります。ぜひとも、この機会に子どもたちが取り組んだ素晴らしい作品とともに、家庭の果たす役割の大切さについて考えたいところです。

コンクールを通して、改めて子どもたちの健やかな成長のために家庭の果たす役割の大切さが再認識され、家庭内での会話や豊かな体験の機会が一層増えていくことを期待しまして、審査講評とさせていただきます。

京都府教育庁指導部学校教育課
指導主事 法橋 秀明